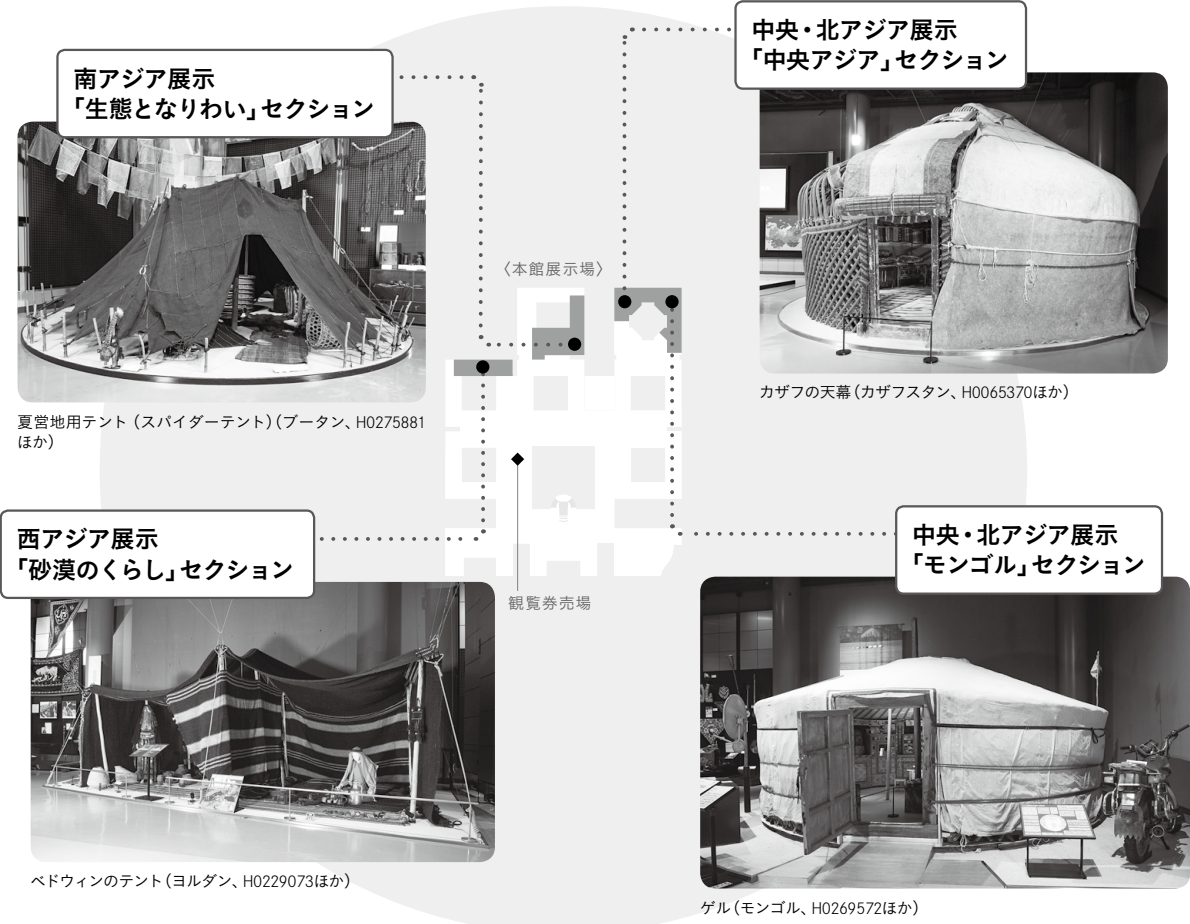


牧畜民のテントをめぐる

人間文化研究機構 総合人間文化研究推進センター 研究員 辛嶋 博善 からしま ひろよし



夏営地用テント(スパイダーテント)(ブータン、H0275881ほか)



カザフの天幕(カザフスタン、H0065370ほか)



ベドウィンのテント(ヨルダン、H0229073ほか)



ゲル(モンゴル、H0269572ほか)

ギの毛で織られた布を地面に張り、柱でもち上げて支える構造のものである。これに対して、中央・北アジア展示のふたつ、すなわちカザフ、モンゴルのテントは骨組みだけで自立できるタイプである。骨組みは、折り畳み式の側壁と天窓、屋根などからなり、円柱形の側壁の上に、円錐形の屋根をのせたような構造になっている。なお、このふたつのテントは似た構造になっているが、細かな違いもある。屋根は天窓から側壁に向かって骨組みとなる棒を放射状に並べるのだが、モンゴルの棒がまっすぐであるのに対し、カザフの棒は側壁に接する方の先端部分が、地面に向かって折れ曲がっている。これによってカザフのテントはモンゴルのものに比べてより高くなるが、風の影響を避けるためにモンゴルのテントのほうが低くなっているともいわれる。

さて、こうしたテントであるが、それぞれの牧畜民にとってはプライベートな場であるばかりでなく、パブリックな場にもなる。ベドウィンのテントの場合には男女のスペースは仕切りによって区切られており、男性のスペースは客間としての役割ももっている。モンゴルの場合、物理的な仕切りはないが、男女、あるいは主人と客のスペースがわかれている。現在ではそうした男女や主客の区分は以前ほど厳格でないようだが、その感覚は残っている。

ベドウィンはテントで客をもてなすときにコーヒーをふるまうが、それは男性の役割とされる。一方、モンゴルでは茶が供されるが、それを用意するのは女性である。コーヒーと茶の違いは伝播、あるいは交易における地理的な要因と関係があるが、牧畜という生業によってそうした役割がどちらかの性に決定されるわけではないようだ。

ちなみに、展示場では、二〇二〇年程のあいだに使われてきたモンゴルの茶とその道具を紹介している。社会とともに、茶のあり方が変化する様子もぜひご覧いただきたい。

季節への対応

近年の日本の夏の酷暑は室内でも熱中症を引き起こしかねないが、乾燥地であれば日陰に入ること暑さをやり過ぎることができる。忘れがちであるがテントは直射日光を凌げるものでもある。最近では家用車が普及して様子が変わりつつあるが、モンゴルでは草原で開催される競馬大会にもテントを持参していたものである。

季節によって、テントのたて方は必ずしも同じではない。モンゴルのテントの場合、側壁の布やフェルトを、夏は開閉できるようにしているが、冬は地面と接する部分に土を盛って固めて隙間風が入らないようにするなど、季節によってたて方を変えるこ

牧畜は人類が依存してきた生業様式のひとつであるが、天候に大きく左右されるうえに、居を移す不便な暮らしというイメージをもたれてしまっているようである。しかしながら、家畜飼養において、住居を移すことは理にかなった手段である。牧畜民が居を移す理由は、家畜の飲用水や食料となる草を求めるためであったり、夏には風通しのよい台地や平原を、冬には日当たりがよく北風を防げる山の南斜面などを利用するためであったりする。定住地に水や食料を運んできたり、ヒーターやクーラーを常時利用したりするよりも、人間が家畜と一緒に居を移すことでコストを抑えることができるならば、それは十分に合理的である。

こうした移動を容易にするのがテントの存在である。現在、民博には、四点の牧畜民のテントが展示されている。南アジアと西アジア展示にひとつずつ、中央・北アジア展示にはふたつのテントがある。テントと聞くと登山愛好家やキャンプ上級者の方々に別すれば心もとなく感じるかもしれない。しかしながら、厳冬のモンゴルやシベリアでもテントで暮らすことができるように、ある程度の居住性が確保されてきたのは間違いない。

テントの構造とそのくらし

西アジア展示のベドウィンのテントは、ヤ



冬営地のテントの傍らにはヒツジ・ヤギ用の柵がたてられる。柵のなかに家畜を隙間なく押し込み、互いの体温を利用して夜間に凍えないようにする(モンゴル、2011年)